



八階ゾーンのフロントには歴代理事長のポर्टレートも

日本記者クラブ会報

第201号
1986年
11月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三二七二二(代)

クラブの模様変え完了

会員アンケートのフォローアップも

夏から秋にかけて進められてき

たクラブの模様変えも、九階北側ゾーンと旧事務局跡の改造で一段落となった。

会見室は三割がた広がり、レストラン入口を狭めていたアコーディオン部分も撤去された。また旧事務局跡は新型の給食用機器を備えた配膳コンコーナーに生まれ変わった。

クラブ機能の拡充強化の主眼——八階ゾーンへの三貸室の増設により、慢性的な部屋不足もおおむね解消されたが、まだ曜日や、時間帯により、申し込みをお断りせねばならぬケースも少なくはない。エレベーターで降りねばならぬのに、八階三室の利用状況もまずは良好。九階から十階ホールへ通ずる専用階段のよう

なものを八階にもつくればとの冗談話も聞かれはするが、それは仕事の規模や費用から考え夢のまた夢。それにしても将来は八、九、十階の有機的使用が望ましい。

アンケート結果へきめこまかい対応

九階ラウンジのソファ類を張り替えたり塗り替えたりしたのも、壁面を飾る外国首脳たちの額面ガラスをロングレア(無反射)にしたのも、この春の会員アンケート調査の要望にこたえたものであった。しかしレストランやバー・ラウンジでのサービスには、まだまだ改善すべき問題が残されている。

十一月十四日の施設運営委員会(犬養康彦委員長)では、アンケート結果のフォローアップとしての点検作業をはじめることにした。会員の要望は年齢や目的によりさまざまではあるにしても、きめこまかい対応を続けようという次第である。

クラブ賞候補推薦にご協力を

六二年度日本記者クラブ賞の推薦委員会は十月三十日に初顔合わせの会合を開き、委員長に青木彰会員(筑波大教授 サンケイOB)を互選した。

受賞者の資格は会員ならびに法人会員社に属するものとなっているので、クラブ会員でなくても該当する。今年も多数の候補者の推薦が望まれる。クラブ賞活性化のため新内規をつくってから二年目にあたり、昨年以上に活発な推薦が行われそう。

これについての実施要領と候補者推薦書は、基本会員と個人D会員の全員におとどけた。本号の会報にも紹介されているが、締め切りは明年一月末。

二月に開く推薦委員会で全候補者についてくわしい審査ののち若干名にしぼりこんだものを、四月の選考委員会(委員長は渡辺襄総務委員長)に具申する。選考委はその具申内容を参考にして選考し、結果を理事会に答申して最終決定という手順。授賞は五月の通常総会で行われる。

とっておきの話

飲んでしまった賞金



土田節郎

ことしの『潮』四月号に創価大教授、ハーバード大講師の板坂元氏が一文を書いて、むかしのラジオ番組について述べていた。

「むかし『伸びゆく子供たち』というのがあった。その一つに、東北のへきの小学校で教えているある老教師の話があった。その先生は新しい教育制度の教員資格を持っていないために、県から退職をすすめられている。しかしその先生は素晴らしかった。毎朝子どもが登校してくると、一人ひとり抱き上げるようにして『めす(メシ)食たか』『くそすたか』と温かく問いかける。それはにわとりがヒヨコを羽の下にはぐくむような、慈愛に満ちた場面だ。唱歌も明治時代の歌を、楽器なしに手拍子で口うつしに教えている。教課も舌をかむようなカリキュラムとはほど遠いものだったに違いない。けれ

ども私は思わず叫び声を上げんばかりに、感動した。(中略)名利にとらわれない老教師の姿はこよなく美しいものに思えた」

実をいうと、この番組を制作していたのは私たちであった。この頃昭和三十年はじめは、民放ラジオが始まって三、四年、街頭の案内放送ぐらいにしか評価されなかった時を経て、ようやく電波媒体として見直され始めた頃であった。平凡社提供で制作された番組が、この「伸びゆく子供たち」である。当時駆け出しのプロデューサーだった私と、大学を卒業して一年目の橋本洋二君(現在もTBSで活躍中)の二人が、番組を担当することになった。

に番組作りに燃えていた時代である。

当時ラジオ東京(現TBS)の社会部に属し、部長は先年亡くなられた大森直道さんであった。大森さんは、番組のテーマを私たちに告げると、教育の問題

方へのき地を訪ねることの方が多かった。地方の片隅には、さまざまな点で恵まれない子供たちを相手に、コッソツと良い仕事を積み重ねている先生がいたが、冒頭に紹介された老先生もその一人であった。

をお前だけに任せておいて出来るかな、といった疑いのまなざしであった。ともかく有力なスタッフをつけてやるということで、大森さんの『改造』時代の友人木村徳三氏、シナリオ作家の須藤出穂氏、高橋辰雄氏がブレインかつ構成員として、「風の会」を名乗って番組に参加、同時に専任の山林正明アナウンサーが配置された。この頃の三十分番組としてはぜいたくともいえるスタッフであった。大森さんは、制作費のことなどあまり気にせずやれと言いうと、どこかへ行ってしまう。

一言いうと、どこかへ行ってしまう。気の小さいプロデューサー連中から少々の制作費を使っても、タカが知れていると思っただけに違いない。

この番組は、有名人は全く出ない。教育現場の実践活動の取材が中心であった。録音取材は北は北海道から南は九州までに及んだが、大都市よりも地

テープをリニックスに数十本もつめて、手巻きのミニコーダー(デンスケ)をかき取りで取材にまわった。地方出張のときなどは、取材費の関係で三十分の番組を二本、三本ととりだめるのである。貧乏社員のくせに、よれよれではあったが一応ワイシャツにネクタイを締めて、各地に出かけた。山の中の分校などを訪ねると、泊まる宿もない。学校の宿直室に泊めてもらって、先生と二級酒をくみ交わしながら親のくらしのこと、子供たちのことなどを話し合った。置き去りにされたような中で、懸命に教育にうちこむ先生の姿は、貧しい日本の一時期でもあった。

私たちが東北の出張先の列車の中で出会ったある光景……。

汽車は白い煙を斜めに上げて、黄色くなった稲穂が揺れる平野を走っていた。外は抜けるような青い空。窓の外はるか彼方の田んぼのはずれに小さな

池が見える。そこで、数人の子供たちが泳いでいるようだ。小さなイガグリ頭が見える。子供たちは汽車が見えたからか、岸にいた子も一斉に池にとびこんで、汽車の通る土手まで泳いで渡ろうとしている様子だ。

汽車は勢いよく蒸気音をまき散らしながら、子供たちのいる池に近づいていく。大急ぎで土手に泳ぎついた子供たちは、われ先に土手にはい上がってくる。汽車めがけて大きく手を振っているが、七、八人の子供たちはみんなパンツはおろかフンドシもしていない。濡れた身体をキラキラと夏の太陽に輝かせながら、左手で急所をおさえ、右手で一生懸命汽車に向かって手を振っている。生まれたばかりの姿で精一杯の子供たちの表現に、乗客の大人たちは、一瞬どきまぎして、手を振ってこたえるのを忘れたようであった。

日本は当時貧しかったかもしれないが、農村には農村の、都会には都会の姿があったようである。

板坂元氏がたまたま「伸びゆく子供たち」を聞いて感動したと述べておられる取材は、福島県のへき地の「あるおじいさん先生」の話であるが、改め

て想い起こしてもらえたことは、私たちにとって胸がぞくぞくとするほどうれしい。しかし当時を振りかえると、頑張ったわりには聴取率はよいとはいえず、残念な思いをした。それでも世の中には珍しいことがあるもので、ようやく民放ラジオが認められ始めたのか励ましのつもりか、私たちの番組が週刊朝日の第一回ダイヤル賞のラジオ部門で賞をもらうことになった。

主旨は、大人の世界の矛盾に冷静な批判の眼を向けながら、子供の生活を温かく見守り……聴取者もいっしょに考えてもらおうとする、良心的な企画の意図と努力は推奨に値する(ダイヤル同人)といったものだった。同時にテレビ部門はNHKの高橋圭三司会の「私の秘密」であった。

受賞の対象は番組であったが、受賞者としてプロデューサーの私たち二人とアナウンサーが記事に載った。週刊朝日は扇谷正造氏を編集人とした発行部数も多い週刊誌だったので、私たちも受賞についてうれしさをかくしきれなかった。昭和三十一年度ラジオ番組ベスト5に入り、年明けて受賞するところになったからである。

ところが、ここで横やりが入った。受賞は結構だが、番組を支えたのは何

もプロデューサーやアナウンサーなど局の人間ばかりではあるまい。番組には「風の会」とグループ名ではあるが構成者も参画しているではないか、それをないがしろにして、放送局の人間だけの顔をするのは許せない、と児童文学者の筒井敬介氏が、二、三号あとの週刊朝日に投書の形で抗議をした。

私たちは番組の取材に協力してくれた先生方や子供たち、それに構成者をソデにした覚えはないし、週刊朝日の編集の人も、代表は局の人でということであった。私たちにしても何も運動をして賞をもらったわけでもなく、関係のない人からイチャモンをつけられるのはおかしいと思いつつも、確かに自分たちだけで番組ができたわけでもなく、取材先の先生方や子供たちの協力なしには放送は実現しない……とも。

このことがあったからかどうかは判然としないが、ダイヤル賞は、これ限り、つまり一回でおしまいになったようである。

賞金の額は発表されなかったが、確か金五万円であったと思う。当時の私たちの月給が資料によれば、昭和三十年四月は税込み本給二万九百円それに六千円の時間外、昭和三十一年の四月

が二万二千円に八千円の時間外、という時代だったから、大金であった。仲間と話し合って、記念品でも作り取材に協力してくれた先生方にでも配ろうという話もあった。(本当はそうする方が正しかったかもしれないと、今でも反省しているが)

そんなに文句がでるのならと、スタッフ一同、もちろん構成に参加した「風の会」のメンバー、木村徳三氏(現在放送関係の企画プロダクションを主宰)、須藤出穂氏、高橋辰雄氏(ともに放送作家として活躍中)ともども銀座のバーで、おおいに飲み、五万円を使い果たしてしまった。

あとで、週刊朝日の人に雑談で、賞金は銀座のバーに捧げた旨を話したところ、渋い顔をされた。まことに「賞」とはむずかしいものである。番組はその後一年半程続いた。

つちだ せつろう氏略歴 大正十三年東京都出身。南洋学院卒。昭和二十七年ラジオ東京(現東京放送)入社。報道局長、技術現業局長、取締役報道局長などを務め、五十八年退社。現在TBSS緑山スタジオ・シティ専務取締役。五十五年から五十六年まで当クラブ理事。

レイキャビク

ワシントン特派員

ワーキングプレス

氷雨にしっとりぬれるイスラノドの首都レイキャビクが、突如として世界から集まったマスコミの喧騒に襲われた。

私たちホワイトハウス記者団百十人を乗せたペンナム・ジャンボ・チャーター機は、米ソ緊急首脳会談二日前の十月九日午後六時五十分、ケフラビク空港に着陸、ただちに貸し切りバスでレイキャビク市内の小さな二流ホテルに仮設された米側プレスセンターへ。

(一流のサガ・ホテルは、すでにソ連側に押さえられた後だった)

まず、各国記者が本社への送稿手段を確保するための、電話ぶん取り合戦に火花を散らす。センターに用意された電話は五十台足らずだから、いきおい「前哨戦」も熾烈になる。ある社が自社名を書きなぐったガムテープを電話に張りつけると、あとからきた他社の特派員が別のテープを上にかぶせようとして、言い合ひになる光景まで目撃させられるハメになった。

もし、歴史的な軍縮合意でも発

表されたら、一分一秒でも早く原稿を送らなければならない。まして小国アイスランドは、国際電話事情が悪い。こんな時は兵たんぐにどれだけ力を入れるかが、勝負の分かれ目になる。小社の場合、幸い、会談一週間前から、ジュネーブ、ロンドンから特派員が先遣隊として現地入り、専用電話、ファクス、テレックスの特設、現地ハイヤーの確保など準備は怠りなかつた。

緊急説明は米人記者のみ

齋藤 彰

だが、本当の苦悩は、十一日午前十時三十分、両首脳が会談のため、「ハフジ館」にはいった瞬間から始まった。米ソ双方とも、事前打ち合わせで、会談終了まで厳しい報道管制を敷いたからだ。報道管制は徹底していた。ふだん親しくつき合っている米政府高官たちも、休けい時間にホテルの廊下で出会うと、わざと視線をそ

らそうとする。やつとつかまえても、会談の中身はおろか、雰囲気についてさえ「ノー・コメント」を繰り返すだけ。常とう手段がダメなら、晩メシに誘い出すしかない。

何とか約束がとれ、一日目の会談が終わった後、某高官のホテルの部屋に迎えに行つたところ、「八時待ち合わせ」のはずが十時になつても戻って来ない。実は、ホワイ

トハウス首脳に呼び出され、会談終了後の共同声明の発表をどうするか、などについて長時間、重要打ち合わせが行われていたという。

ところが、二日目にはいつて、会談は、アメリカの「戦略防衛構想(SDI)」規制問題をめぐって一転、険悪な空気になり、対立が解けないまま決裂、せつかく前日までに合意した軍縮関係の共同声明発表もとりやめになったことは、すでに報じられた通りである。

会談終了後、ニッツ大統領

領顧問(軍縮担当)、エーデルマン軍備管理・軍縮局長、パール国防次官補らが、ホテルの一室に集まり、米人記者十数人をこっそり招いて、結果について緊急説明会を開いた。私も、現場をかぎつけ、はいり込もうとしたところ、「外国人記者はかんべんしてもらいたい」と締め出された。

同じホワイトハウス記者団でも、米国人記者と外国特派員の間、激然とした差別があることを、改めて痛感させられることになった。何かにつけて、日本の「記者クラブ」の閉鎖性がやり玉に上がる。だが、実態は、アメリカもたいして変わらないのである。

(さいとう あきら 読売新聞社ワシントン特派員)



帰国後のテレビ報告(10.13 写真=WWP)

レイキャビク

モスクワ特派員

ワーキングプレス

モスクワを立って、コペンハーゲンで乗りつぎ便を待つのに五時間ほどを費やし、レイキャビクに入ったのは十月八日深夜（日本時間、九日朝）だった。冷たい雨がたたきつけるように降っていた。

米ソ首脳会談の取材は、昨春秋のジュネーブに続いて二度目だが、今度はひとつ気になることがあった。前日に出発した知り合いのソ連筋が「もしかしたら、我々の宿舎は、ソ連が送り込んである船になるかもしれない」と言い残して行ったからだ。

しかもレイキャビク会談はワシントンでの本格会談に備える準備会談。「お互いに宣傳戦を避け、実質的な前進を図るのに力を注ぐ。当然、報道管制が行われる」とも聞いていた。取材の相手が船にいるのでは、夜討ち朝駆け、廊下トンビも難しくなるのではないか。船に電話はつながらのらうか――。

約十年前、ブレジネフ時代の後期に、最初のモスクワ勤務をした。書記長のフランス、西独訪問に同行取材したが、当時は、会談の最

側近は深夜、早朝取材もOK

新妻 義輔

終日にスポーツスマンが一回だけ記者会見し、それで終わり。それがゴルバチョフ時代になってからは、側近グループ、有力なジャーナリストが、深夜、早朝でも取材に応じるようになってきている。「クレムリンの壁は高く、直接取材はとても無理です」と、すましているわけにはいかない。

プレスセンターで、記者証の交付手続きをしながらきいてみた。

「ソ連側の宿舎は船だと聞いていますが、どのあたりですか」

「いや違います。その向こうの広場を横切って、そうですわ、歩いて五分もかかりませんよ」

ホッとした。ホテルなら自由に入れる。

翌朝の最初の仕事は「部屋探し」だ。だれが何号室に泊まっているのか、何とか十人を超える名簿が出来あがった。

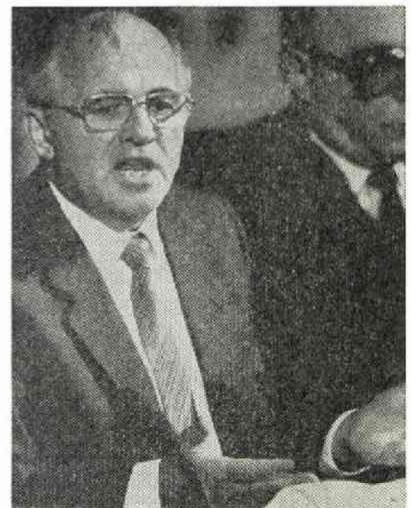
十日午後一時過ぎゴルバチョフ書記長がレイキャビクに到着。第一回会談に備えて、政策担当グループとの打ち合わせが予定されていた。この中身をつかみたい、それが無理ならせめて空気だけでも知りたいと思

った。

レイキャビクと東京の時は九時間。現地の夕方四時半に朝刊の締め切りが来る。夕刊用の原稿を送り出すまでに時間は十分ある。

だれか一人でもつかまえないか。「夜、食事しませぬか」。ソ連有力紙の評論員に声をかけた。午後七時の約束に三十分ほど遅れて来た相手は、「私だけでなく他の人も一緒に、と思ったけど、遅れるようだから先に行きましょう」。午後九時ごろ、我々が先着していたレストランに軍縮・軍備管理、米国問題、地域問題の専門家がそろって現れた。

首脳会談がスタートしてから、予想通り報道管制が始まった。記



会談終了後の記者会見（10.13 写真=WWP）

者会見に現れたベリホフ・ソ連科学アカデミー副総裁、アルバトフ米国カナダ研究所長を記者団がどつとり囲み、インタビューを申し込む、こちらもねばる他ないと。アルバトフ氏の背後にくっついて会見場の出口に向かった。追いつがる記者の数が次第に減っていく中で「インタビューを」と繰り返すと、「では、私の部屋で」と答えが返って来た。

首脳会談が重い幕切れを迎え、レイキャビクを去る日、空にはオロラが帯状に揺れ光っていた。

（にいつま よしすけ 朝日新聞社モスクワ特派員）

大会臨時労働国

スプレッシングワー

国労の第五十回臨時全国大会——国鉄はもちろん、戦後の労働運動史上、最大の出来事の一つだったかもしれない。それは十月九、十の両日、静岡県修善寺町で開かれた。約五千二百世帯、一万八千人足らずの、いつもは静かな湯の町は騒然とした雰囲気にも包まれた。

会場の大ホールは収容人数千二百人。これに対し、三百六人の代議員を含め約二千五百人の組合員。加えて総勢三十八人のスタッフを現地入りさせたテレビ局をはじめ、各社とも記者を大動員した。労働省記者会などで用意した臨電は五十

七本。そのほかに独自に臨電をひいたところもあり、六十六平方メートルの臨時記者室には、天井からコードがクモの糸のように垂れ下がった。

そんな状況下での取材は、混乱を極めた。

第一に、大会の成り行きについて最後まで、各社とも見通しがつけ切れなかったことだ。本部提案を①可決②可決しても大幅修正す

る③否決④流会⑤延会——のいずれかとストーリーを読んだ。大会の最終段階で「全組合員の投票で是非を問う」という線が出た。③の否決にしても、十票前後の差というのが総評、執行部の読みだった。それが賛成百一票、反対百八十三票という大差がついた。傍聴に集まった組合員のほとんどが柔軟路線に反対という雰囲気、代議員がのみ込まれた結果であった。

深夜「流会情報」流れる

古川紀美

第二に、大会会場と報道陣に割り当てられた宿舎が、車で二、三十分はかかる伊豆長岡に置かれた不便さも、苦勞に輪をかけた。

第三が最大のネックになった山崎俊一委員長(当時)周辺の、取材に対するガードの固さだった。大会運営は開催地の地方本部が担当するという原則が崩され、柔軟路線をとる静岡地本でなく、強硬派の東京地本が担当した。「本部

案に反対の組合員から守る」の名目で会場の役員室への取材は一切ダメ。山崎委員長が移動するさいは、その周囲を東京地本の若手組合員十人前後ががっちり固め、近づくことも出来ないほどだった。

さらに九日夜にいたっては、本部宿舎の部屋割り garaり と変わり、報道陣の「夜討ち」をかわした。宿舎のフロントも「部屋割りは口止めされてます」と

いう徹底したものであった。そのなかで、執行部(当時)の徹夜の「調整」が続けられた。二人の副委員長さえも、具体的な調整に参加しないまま、山崎委員長らひとにぎりの役員が血まなこになっての折衝だった。

その日の深夜、伊豆長岡の報道陣宿舎に一つの情報が流れた。「流会やむなし」の指令が、社会党、総評筋から出たという。「組織だけは守れ」。採決すれば否決されるのはつきりしているため、大会欠席で流会させようという最後の選択であり、組織分裂もさげら

れる、という見通しだ。時間は夜十一時半過ぎ。伊豆長岡から修善寺までタクシーをとばし三軒、四軒と役員宿舎を回り、情報を確かめる。結局、「そうらしい」という感触だけで、紙面化までには至らなかった。

結果は、一転して大差の否決。十日は祝日で夕刊なしだったため、無理をして「流会情報」を活性化しておれば、十日朝刊で「流会か」と報じ、十一日朝刊で「否決」と修正する、みっともない紙面作りになるところだった。今後とも派閥対立で有名な国労とは、骨の折れるつき合いになりそうだ。



本部案は大差で否決された (10.10)

(ふるかわのりよし 東京新聞社会部)

日本シリーズ

ワーキングプレス

感動、ジーンとくる、体に電気が走る——言葉で、文字で言い表わせない何かを、初めて体験した一日だった。

十月二十七日、雲間からわずかに夕日が差し込んだ広島市民球場。一人の選手が宙に舞った。背番号8。「コージ」コールドが球場全体を包んだ。興奮。プロ野球史上初の日本シリーズ第8戦は、西武ライオンズが広島東洋カープを破り、日本一の座についた。

勝者、森監督が胴上げされるのは当然。しかしシナリオになかった山本浩二の胴上げシーンを見て、担当する広島が敗れた悔しさ、そしてこれまでの疲れはすつと消えていった。

とにかく、たいへんなシーズン、シリーズだった。広島は九月二十三日からの天王山、巨人3連戦に勝ち越し、待望のマジックが点灯した。カープ番記者の周囲も一気に慌ただしくなった。Xデーに備えての取材のし直し、社内雑誌の原稿執筆など。だが、今一つ気が乗らなかつた。何せライバル巨人が負けないため、マジックは自力

ミスター赤ヘルの胴上げ

時 永 彰 治

でしか消えず、鈍い足取り。一時は全勝マジックで、一つも負けられない剣が峰にも立たされた。広島の方が残り試合が多く、「絶対にないよ」「無理、無理」との声も。しかも、打てない赤ヘルをずっと見てきているだけに、自分ですえ、「まさか。あつたら奇跡」。ベンが走らないのも道理だろう。ところが、結果はその「まさか」に「奇跡」。ペナントレースの1

たほどだから、広島ナインは推して知るべし。巨人とのシ烈な優勝争いに燃え尽きたとさえ言えた。腰痛に悩まされた山本浩二、極度の不振に精神的にも落ち込んでいた衣笠……。一方の西武はゴールデンルーキー清原を筆頭に、若さあふれるチームだった。

広島で火ぶたを切った日本シリーズ。初めて清原を見た。「やはり大きいなあ」「当たれば飛びそるじゃのう」。山本浩二に聞く。「パワーじゃ負ける。テクニクで」。

第1戦、早くもその言葉が現実となる。九回裏、東尾から起死回生の同点アーチ。「うーん」「さすが」とうなづいてしまった。この一発で広島

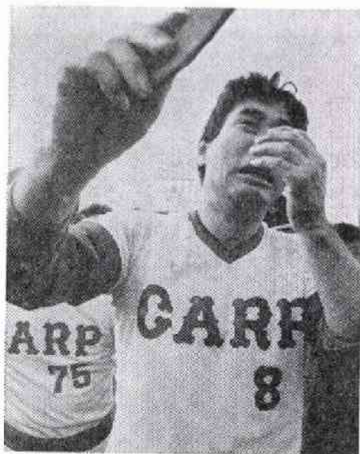
が弾んだ。1戦を引き分けた後、3連勝で王手。ナインの顔も生き生きしていた。「こりゃあ、いけるぞ」。日本一の紙面をどうするか。頭の中は早くも祝勝ムード。

が、一気に暗転する。第5戦、西武の投手工藤のサヨナラ打である。その日を境に勢いは逆流

した。勢いというものは怖い。西武の若さをはじける。「一つぐらいは勝てるだろう」という期待もはかなく消えた。シーズン同様、1点を争い、ゲームの終盤までもつれる展開の再現。胃がキリキリ痛み、頭のヒューズも何本か飛んだ感じだった。それだけに、山本浩二の胴上げ、ベンチ前で去り行く僚友を静かに見守っていた衣笠のシーンは強烈にまぶたに焼きついている。

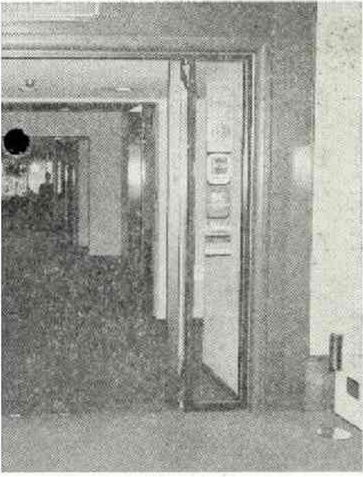
試合の勝負と、偉大な選手、ミスター赤ヘルの引退ドラマ。二本立て報道の中で、さまざまなファンの反応、読者ニーズに十分こたえられたか、どうか——。今、それを自問自答している。

(中国新聞社運動部 ときなが しょうじ)



背番号8は水久久香に

9階 クラブルーム 模様変え終わる



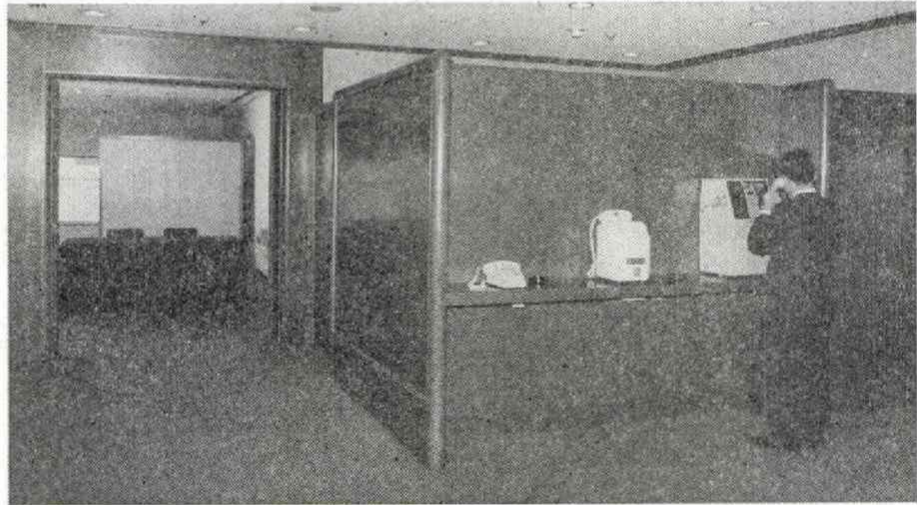
動けるように、ドアはすべてオープンに

れ、広くなったレストラン前のホールに
付きのロッカーが備えられます。

たくサービスするための料理用ウオー



記者会見室内の家具車を撤去しましたので、北ホールの旧クローク部分を収納庫に改造しました。



第75回会報委員会(10・13 第2会議室)

十月号について意見交換の後、十一月号の編集を協議した。

出席 深川委員長。林、井出、斎藤、安延の各委員。

第138回企画委員会(10・20 大会議室)

司会をした委員による行事報告の後、十一月のクラブゲストの選考について意見を交換した。SDIとバイオテクノロジーで研究会をそれぞれ行うことにした。また「コメと農業政策」をテーマにシリーズ研究会を行うため、幹事を決めた。

出席 藤村委員長。浅井、山岸、広瀬、井上、有賀、石丸、高野、藤川、白井、河野、有馬、中川、三宅、村野の各委員。

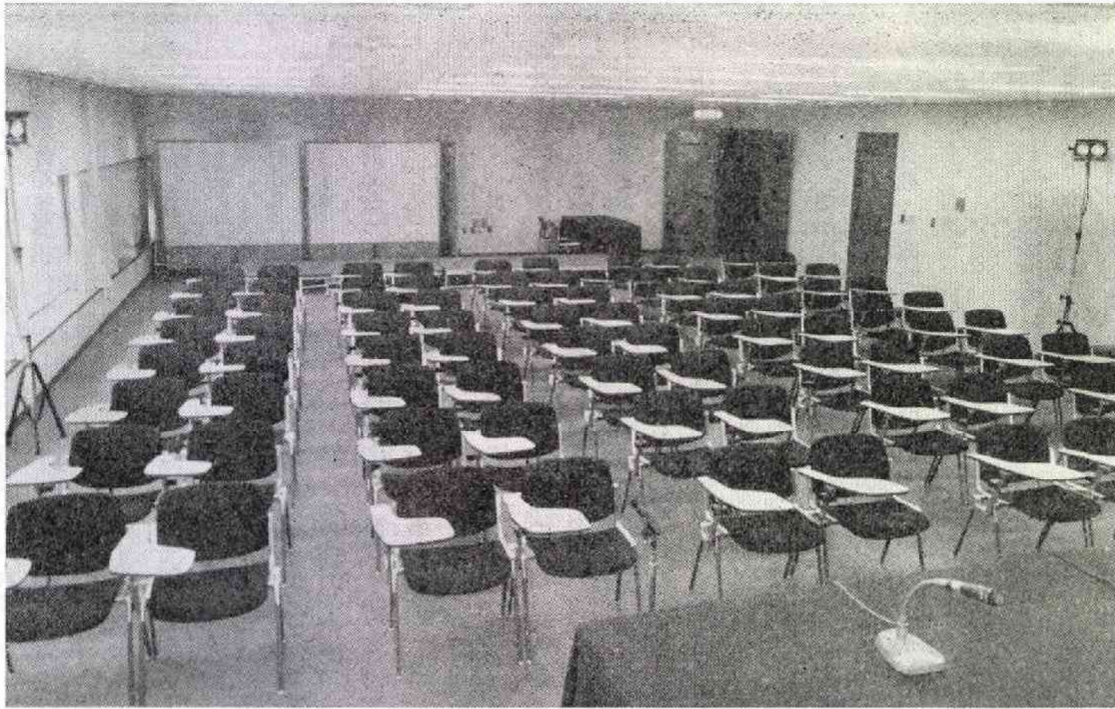
第31回施設運営委員会(10・22 第2会議室)

会見室拡張、北ホール改修、配せん室新設等の作業経過と、各室の利用状況についての事務局報告を了承後、現場を見学した。

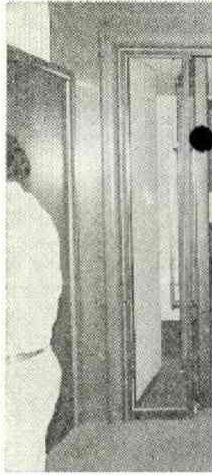
出席 犬養委員長。佐川、根津、和田、宮地、山崎、黒木の各委員。

第110回会員資格委員会(10・23 第2会議室)

十一月一日付入退会について審議し、理事会へ答申した。



合 記者会見室を拡張しました。100席のいすとカメラ取材用のステージも常設できるようになりました。



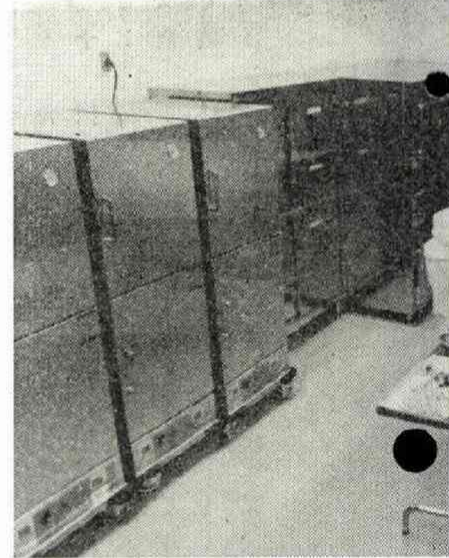
合 サービスワゴンが
しています。

アコーディオン部分
は、ハンガーボック

▽ キッチンも一部手直ししました。ここをメインに、10階のアラスカのキッチンの応援も受けて
レストラン(70席)と、各会議室での会食、パーティーなどの料理を作っています。



▽ 温かいディッシュは温かく、冷たいディ
マーやクーラーが備えられた配せん室。



出席 渡辺委員長。小池、加藤、樋口、
青木、埜呂の各委員。

62年度日本記者クラブ賞推薦委員会
(10・30 小会議室)

委員長に青木彰氏(個人D会員)を互
選した。

出席 青木、緒方、五味、正田、村上、
野崎の各委員。

◆ゴルフの会◆

永野会員(東京OB)が優勝

第四十七回ゴルフ会は快晴の中、山梨
県都留CCで開催され、二十七名が参加
しました。スコアは山岳コースが災いし
てか、または雄大な富士山を仰ぎ見過ぎ
たせい、フタケタでおさまったのが六
名という大量生産ぶり。優勝はワンアン
ダINET71の永野信利(東京OB)、
二位西山武典(共同OB)73、三位久保文
男(共同OB)73、BB高田秀二各会員
という結果となりました。

懇親会の席上、忘年ゴルフ会開催の要
望があり、十二月十二日(金)程ヶ谷CC
十時スタートで開催する手順にしました
ので、参加ご希望の会員は事務局へお申
し込みください。なお賞品は各自一個ず
つお持ち寄りのものを交換いたします。

ク ラ ブ ゲ ス ト

P・M・ヴァリコーネン フィンランド副首相兼外相



九月三十日 国賓として来日したコイビスト大統領に随行。二年前にも訪日している。「円が

非常に高くなったのを実感し驚いている」。四十歳の若さで、連立与党・中央党総裁でもある。一見、頼りなげにすら見えるのだが、同国の置かれている特異な地理的、国際政治状況の中で育った政治家らしく、話には含蓄がある。

「東西関係の改善に関係するものはすべて国益につながる」。ゴルバチョフ書記長の下でのソ連は、外交活動を活発化させ、他の国々の動きによりすみやかに反応し、国際問題の解決を模索している。「主要分野は軍備管理・軍縮で、我々の情報ではINFでの進展が最も可能性が高い」。

日本との関係では四倍以上の輸入超過だが、全体の二〇%を占める対ソ貿易では大幅黒字で、黒字べらしを考えなくてはいけないほど。チェルノブイリ事故でのソ連の対応をき

かれば「危険量の放射能影響はなかったのだが、観光収入面での被害が大きかった」。「事故に際しての国際的な対応と協力の必要性が示された」。「わが国ではソ連製とスウェーデン製それぞれ二基計四基の原子炉で、電力の四〇%をまかなっているが、ソ連製のものには、西側基準のもとに開発した独自の安全システムが整備されている」。「ソ連も惨たんたる被害をうけたので、安全性確保にさらに努力を傾注していると思う」。

【二月二日(木) 記者会見 司会 有賀忍企画委員 通訳 キヤサリン・スターリング 出席 七四人】

ペーター・ヤンコビッチ オーストリア外相

ウィーン生まれで五十三歳。一九五七年外務省入り。国連大使、OECD大使などを歴任し、去る六月の内閣改造で初入閣した。初めの予定を一日繰り上げ、倉成外相との会談直後の会見となった。

レイキャビクでの米ソ首脳会談の結果については「大きな実りを期待していただけに、会談の失敗は心配のタネだ」と



しながらも、「両国の努力の継続を信じる」とも。十一月四日にウィーンで開かれる、全欧安保再検討会議が今後の米ソ交渉

の行方をはかる目安になるとし、シュルツ・シェワルナゼ会談の実現を希望した。

原発問題に関して「我が国はヨーロッパで核エネルギー利用を放棄した最初の国」と前置き、周辺国の核政策に干渉はできないが「二国間条約による情報交換を通じて安全性を求めたい」。またIAEA(本部はウィーン)の存在意義も同時に強調した。【二月二日(水) 記者会見 司会 白井淳一企画委員 通訳 村松増美 出席 三人】

リー・クアン・ユー シンガポール首相

「私は真実を語る用意がある。真実がいかに私を傷つけようとも」。シンガポール自治州の初代首相就任から数えて在任期間二十七年。人口二五〇万人強の多民族国家を率いて、アジア有数の経済成長を達成してきた。「どんな質問でもどうぞ」と、むしろ会見でのやりとりを楽しむかのよう。

アセアン諸国の世界貿易に占める「対日貿易」のシェアは二五%、一方、日本の「対アセアン貿易」のそれは一〇%、これが関係の密接さを端的に物語る。したがって、日本が今後どのような道を選択するかが重大な関心事であり、「われわれの目は、日本の対外政策のみならず、国内政策にますます向けられるようになってきている」。たとえば、三兆五千億円の建設事業、

ゲスト・カースト

- イズハル・ハッサン・パルニー (パキスタン ドーン紙)
- フォーリン・プレスセンター第6回中近東地域記者研修参加者 (9・28~10・25) 11ワヒッド・アブデル・メギード (エジプト アル・アラム紙) ラミース・アブドニー (ヨルダン ヨルダン・タイムズ紙) ファディア・モハマッド・モニア・アルズビ (クウェート アル・ワタン紙) ムスタファ・アリ・ラビブ (カタール アツラーヤ紙) アブデル・ガディール・アツラーヤ紙) アブデル・ガディール・エルサマニ・モハメッド (スーダン 国営通信社) シナースイ・ダヌシオール (トルコ ギュネッシュ紙) タウフィーク・サーレム・バザラア (アラブ首長国連邦 国営通信社) 同第4回中南米記者研修参加者 (10・19~11・15) 11ルイス・サルトリ (アルゼンチン クラリン紙) マルコス・ウイロン (ブラジル オ・エスタド・デ・サン・パウロ紙) ホセ・エドゥアルド・サルコ・ボラノ (グアテマラ ブランサ・リブレ紙) テレーズ・マルゴリス (エル・ソル・デ・メヒコ紙) ホルヘ・マテオ・グラナダ (パラグアイ チャンネル7) フェルナンド・マッキー・トウエロス (ペルー エル・コメルシオ紙) ラウル・ロンソニー (ウルグアイ エル・ディア紙) ホルヘ・ビジャルバ (ベ

ク ラ ブ ゲ ス ト



一兆円の建設国債といった話題であり、米、ECと並ぶパワーステーションの日本は、活動を停止せず、「ぜひ四%成長を実現してほしい」。先の中曽根リマークスを意識したのか、「米国内で、少数民族の雇用増大のためにとられているアフタータイプ・アクションは悪くない考えだ。ただ、この言葉は、少数民族への差別をなくす積極的な行動といふことだが、ややきつい。日本語には美しい言葉もあるはず」と、東南アジアで果たす日本の役割にひっかけて、やんわりと注文した。

訪日は十一回目、クラブ訪問は二度目。大鳴門橋、瀬戸大橋視察や京都ツアーなど余裕ある日程だった。同行の首相夫人に、さる五月、記者会見した子息リー・シェン・ロン商行相代行の署名を見せると、「おお、ロンノ」とにっこり。【二〇月二六日（木）昼食会 司会 常盤恭一副理事長 通訳 村松増美 出席 一五五人】

完倉 寿郎 軍事問題評論家

四〇年以上にわたりソ連軍の実態研究一筋。この間関東軍参謀、大本営陸軍参謀、GHQ情報局顧問、大陸問題研究所所員、外務省嘱託などを務める。SDIをめぐるソ連の党・軍関係に関心が高まる中で研究会。

党は軍の創設者で育成者で指導者であり、高級将官の人事、予算はすべて党の手中にある。「国防大臣を頂点にした軍事系統と党中央委を頂点にする政治系統という二元統帥的系統になっている」。未確認だがKGB将校が身分を隠して軍にいるとも言われる。「私は両者の関係は対立と抗争の歴史と考える」。



①党・軍関係の根本原則②対立の事例③なぜいがみ合うか——の順に、最近のウスチノフ国防相とオガルコフ前参謀総長の確執なども解説した。軍の予算ムダ遣い、党の軍事・人口政策等の失態で、党による軍の締めつけと軍の党批判は今後も続くだろうが、「決定的なものにはなりえない。だんだん軍にある程度理解させた上でやらなくてはならないだろうが」。【二〇月二三日（木）シリーズ研究会「ソ連—その実態と意図」(XIII) 司会 木村明生企画委員 出席 七一人】

H・M・ブリックス IAEA事務局長



チェルノブイリの事故現場を見た最初の外国人の一人。「原子炉の上に屋根が崩れ落ちて、銀色のケムリが立ちのぼっていた」。

このことをテレビリポーターに話したところ、「原子炉はまだ燃えている」の誤報になってしまったが、実は「グラフイト（黒鉛）が燃えていれば黒煙があがるわけで、熱をもっていたのでカバリーをかぶせていたためだった」。

この事件以後、国際原子力機関（IAEA）での原発の安全問題論議がクローズアップされ、「四週間で二度の他国間会議を開き、早期通報と相互援助の二条約案をまとめ、九月の特別総会で採択された」。

質問に答え、中国とのセーフガード交渉の見通しについて「楽観視している。八月に始まったので、一年くらいでまると思う」。英サンデータイムズのイスラエルの「地下施設」記事については「独自につくった施設の場合、査察できない状態。プルトニウムを短期間につくれると公言しているので、驚きではない」。【二〇月三〇日（木）記者会見 司会 村野賢哉企画委員 通訳 小松達也 出席 四三人】

ネズエラ エル・ウンベルサル紙

- 本新聞協会第13回日米記者交換参加者
- (11・9/28) IIランス・デッキー (オレゴン州)
 - サレム・ステーツマン・ジャーナル紙)
 - フランセス・ハーディン (ワシントンD.C. CNN)
 - ラルフ・ジョンソン (オハイオ州)
 - トレド・ブリード紙)
 - リチャード・リーフアー (イリノイ州)
 - シカゴ・トリビュン紙)
 - ジャック・ベイトン (フロリダ州)
 - セント・ピーターズバーグ・タイムズ紙)
 - スーザン・ポラック (ミシガン州)
 - デトロイト・ニューズ紙)
 - デービッド・ラッソ (ワシントンD.C. NBC ニューズ)
 - マーガレット・シャープ (ニューヨーク州)
 - AP通信)
 - マリリン・ウリッキオ (ペンシルベニア州)
 - ピッツバーグ・ポスト・ガゼット紙)

十一月一日現在の会員状況

法人会員	一四六社
基本会員	六一九人
個人会員	一、三四二人
法人・個人賛助会員	七七社
特別賛助会員	二三三人
名誉会員	七五人
計	二二三社 二、二八五人

スタジオ訪問

日本テレビ

『ライブオンネットワーク』

明るくのびのび
と井田由美アナ

午前九時三十分出社。十時第一回の打ち合わせ。午後二時最終ミーティング。ここでその日のニュース項目が決まる。

六時本番スタート。同五十五分生放送終了。そして七時から翌日放送分のレクチャー。八時十五分反省会。九時三十分退社予定。だが、この時刻に反省会が終わったことはない。

これは、九月二十九日から始まった日本テレビ「NNNライブオンネットワーク」(月・金)のスタッフの一日だ。スタート第一週は十五、六時間勤務という日もあったという。十月十七日、そのスタッフの熱気と意気込みと、そして戸惑いが、まだ少し残る報道センターを訪ねた。

「スタートして三週間、まだまだ視聴者に浸透したとはいえないが、毎日を精一杯やっています」と仁科俊介ニュース

センター長。同番組はそれまでのオンラインドックスタイルのニュースを一新、時間も三十分繰り上げ六時からとした。「長年まんの時間帯だったところにニュースをもっていったのですから、正直言ってしんどい。チャネル選択は習慣性が強いですからね」と言う。六時台は、ニュース番組の「激戦地」である。そこで新参のNTVとしては同番組ならではの特徴を、視聴者にアピールしなければならなかった。その目玉となったのが初の女性キャスター起用で、アナウンサー井田由美さんの登場だった。

しかし当の井田さんは、「それが特別なこととはちっとも思わなかった」と屈託ない。「とにかく楽しい。私なりに自由にやらせてもらえる雰囲気なので、力まないでカメラに向かえます」と、小柄な体を弾ませるようにして語る。確かに画面の中の井田さんの、のびのびとした明るさはとても新鮮だ。「ニュースは硬派で常に動いている。でも私自身はそれに巻き込まれないようにと心がけています。私はあくまで受け手、視聴者の代表のつもりです。女性をことさらに強調されることに抵抗はあるが、生活に根ざした普通の人の感覚」を大切にしたいとも語る。こうした井田さんのキャラクターは、六時台の主な視聴者であり、同性に

はきびしい主婦層にも、まずは合格点をもらっているようだ。

井田さんは、番組中五十五分間ずっと立ったまま話す。その理由を斎藤太郎制作部長は次のように説明する。「演出家としてすわらせるといのは、一番おいしいところを殺してしまおうような気がします。立って体重が左右に移動することで、喜びやいきどおりみたいなものが伝わるのではないしょうか」。

この他番組では、外人コメンテーターの起用、その日発生したベタ記事的なニュースを時系列的に順を追って紹介する『タイムドキュメント』など、新手法が試みられている。

十月一日、同番組では森進一・森昌子の結婚式を生中継した。この時「あれがニュースか」と、局内でも相当の反発が出たらしい。でもそうした人々も、翌日には頭をかかえてしまったという。視聴率が前日の四倍近くにもはね上がったというのだ。

「こうなると一種の社会的な出来事で、ニュースなんです。いま娯楽的なものとニュースが接近してきている。もちろん、これを同一視してはいけないが、たいたいも視聴者の最大関心事は何なのか、を考えなければなりません」と仁科さんは言う。斎藤さんもこう続ける。「これまでは送り手が精選してニュース

を送っていたが、これからは受け手側がひろい出す時代なのではないか。送り手側の勝手だけの、上意下達型ニュースだけは避けたい」。

同番組登場までには、局内やネット間でも紆余曲折があったそう。両氏とも「とにかく今は視聴率がほしい」と言う。数字があつてこそ新機軸にも挑戦できるということだ。顔の見えない生身の受け手の感触や反応を、視聴率という数字でどこまで正確につかめるかは別としても、ニュース番組制作現場の人たちの本心でもあろう。

「今はあくまで次のステップへの予備的段階。来年には六時〜七時三十分の超ワイドニュースをスタートさせたい」と仁科さんは語る。

(長谷川和子)



本番中も笑顔がはずむ井田さん。
「今は、この番組に『歓喜』されています」

プロフィール

十月一日付入会の個人D会員、法人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

紹介会

1日▽フォーリンプレスセンター創立記念パーティー(河村欣二会員) 6日▽博報堂「広告」座談会—中條高德アサヒビル専務取締役、杉浦欽介味の素常務取締役、松村幸夫サンケイ新聞取締役(博報堂 黒田杏子会員) 8日▽九州編集会—東京支社編集部長(フクニチ 水倉光慧会員)▽運動部長懇談会—中央競馬会との懇談(IPR 梅崎義人会員)▽時事懇談会(時事 小林正雄会員)▽放送番組向上委員会(矢野輝雄会員) 9日▽銀杏クラブ—「帝国大学新聞」編集部OBの集い(殿木圭一会員)▽在京九社編集局長会(協会 宝子山幸充会員) 13日▽日経政治部OB会(新井明会員)▽欧州記者研修計画参加者歓迎レセプション(協会 阪田秀会員)▽第13回海外日系新聞協会年次大会(滝沢源一会員) 15日▽地方紙演劇記者会(道新 池上忠行会員) 16日▽86国際ソーリングカー耐久レース公式発表会(フジTV 渡辺修会員)▽日中駅伝調印記者会見(東京加藤龍馬会員) 21日▽新春座談会—永野健三菱金属社長、藤森正路住友金属鋁山社長、田中淳一郎田中貴金属社長(日本工業 渡部行会員) 22日▽東京北国クラブ(北国 池田穰会員)▽東京愛媛クラブ例会(愛媛 堀定省会員) 24日▽新



第24回日韓編集セミナー。今年のテーマは「文化・学芸報道の問題点」で、韓国側13名、日本側21名が参加した。(10.28 宴会場)

聞広告を考える会—地方紙東京支社長(福井 菊池智会員) 27日▽日工産業人クラブ—講師 尾身幸次衆院議員(日本工業 山崎定世会員) 27日▽労働ベソクラブ(矢加部勝美会員)▽農業問題研究会(文化放 柳沢紀夫会員) 28日▽第24回日韓編集セミナー(協会 阪田秀会員)▽日本ABC協会創立祝賀会(井上済会員) 30日▽政治記者OB会(今井久夫会員) 31日▽民放解説者研究会 講師 渡辺美智雄衆院議員(朝日放岡村黎明会員)▽青森県ジャーナリストの会(陸奥 川越淳宏会員)▽股野景親新ベトナム大使を囲む会(朝日 柴田鉄治会員)

〔会員がクラブ施設を利用して行った主な会合です。十月の総回数は一三三回でした。〕



▼今年で新聞稼業も五十五年になる。といても文相と国旗問題などでわたりあえる「老ジャーナリスト」ではなく、プレスセンター内に居をかまえる新聞週刊団体の老マネジャー。この仕事についてもう十年以上になる。

(個人D・日本新聞製作技術懇話会 マネジャー 安養寺敏郎)

▼当社初の劇場用映画「首都消失」がクランクアップしました。原作は小松左京氏で85年の日本SF大賞を受賞した作品の映画化です。

いきおいおつきあいの幅も広くなり、新聞社や、機器メーカーの部長さんから「おやじがお世話になりました」というあいさつをうけ、おどろいていたが、昨今は「祖父がお世話になって……」などの言葉も一度ならず聞くようになった。はるかかなり五十五年の思いにひたっている今日このごろである。

正体不明の異常現象により、すべての通信、音波が途絶し、東京はブラックアウトと化した。映画は首都東京を失った日本の政治、経済、社会をたて直すため、必死に闘う生き残った人々の人間ドラマを描きます。監督は舛田利雄、特撮中野昭慶で、主演は渡瀬恒彦、名取裕子。明年一月十七日(土)から東宝系で公開の予定です。

(関西テレビ 楠田久泰)

○囲碁の会

十一月一日(土)はおよそ四十日ぶりの例会。日米野球第一戦は雨で七回コールドゲームとなったが、碁の方は六段から1級まで十九人が集まって総対局数37、午後七時に閉会となったからもラウンジで延長戦が続いた。

二年半の闘病が医者との誤診とわかって頭に来たかホッとしたりか、吉沢六段は相変わらず碁盤にたたきつけるような早打

ちで五勝二敗。出席の機会が少なくなかなか昇段できなかった西崎四段は、五、七、十一月と三勝ずつの九連勝が効いて、丸二年かけて十三勝三敗・八一二で五段に。

大日向、宮沢の両四段、中俣三段、相川二段がいい成績でした。

次回は十一月二十九日(土)午後一時から。



写真部

ガラス張りのスタジオ

写真 馬田 広 亘 (朝日新聞大阪本社写真部)

米のエジソンがキネトスコープ、仏のル
ュミエール兄弟がシネマトグラフを發明し、
世界初の一般公開をしたのが明治二十八年
(一八九五年)である。そして二年後の明
治三十年には、大阪で日本最初の映画興業
が始まっている。

日本人による初の映画撮影は、同じ三十
年に、小西写真機店がフランスからカメラ
とフィルム六本を輸入、屋外で撮影、十一
年後の明治四十一年には、東京・目黒の行
人坂に初の映画スタジオ「ガラスステージ」
が完成した。今回、京都の映画村で再現さ
れたモデルである。第一回劇映画は、川上音
次郎一座のコメディ「和洋折衷結婚式」
およそ十五分であった。当時の世界事情か
ら考えると、映画普及のスピードは今日の
テレビ以上に驚異である。この写真には、
一人の映像人として深い感慨を覚える。

「金色夜叉」の撮影風景だが、この映画
は大正七年、日本で二番目に出来た日活の
向島撮影所の「ガラスステージ」で撮られ
たものだ。当時のフィルムの感度は、今で
言うところとASA400ぐらいで、照明技術も
未発達だったから、ガラス張りスタジオの
自然光を必要としたのである。

今日は映像時代と言われるが、映画の公
開からわずか九十一年しか経っていない。

(牛山 純一)

昭和62年度「日本記者クラブ賞」の候補者を推薦願います

取材、報道、評論活動などを通じて、ジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、一月三十一日までに候補としてご推薦ください。

◇「選考基準」は左記の通りです。

- (1) 現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である。(現役という意味は現に活動しているという事で、故人を対象としない)
 - (2) 活動が長期にわたるとい意味での「敬老賞」でもなく、日の当たらない困難なところで活動しているという意味での「風雪賞」でもない。
 - (3) スクーパ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。
 - (4) その存在および業績がジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。
- ◇会員およびプレス会員社に属する方々が候補資格者です。
- ◇推薦者は、所定用紙に候補の氏名、略歴等を記入し、四百字づつ原稿用紙五枚以内に推薦理由をまとめ、必要な参考資料を添えて事務局へ提出願います。
- ◇詳細につきましては、事務局(五〇三)二七二二へお問い合わせください。

「五十人の新聞人」をいただきました

会報委員会(9/17)の席上、斎藤吉史委員が、昭和三十年に電通が出した『五十人の新聞人』を紹介、話題になりました。中村事務局長が当クラブの法人賛助会員でもある田丸秀治相談役にクラブのライブラリーへの寄贈をお願いしたところ、早速貴重な一冊を送りいただきました。

古い本なので電通の図書室でもすぐには見つからず、いろいろと手をつくして捜してください、残部三冊のうちの一冊をご恵贈くださいました。

五十人の中には、会員の千葉雄次郎、松本重治の両氏も登場しますが、配列は年長順。ご両氏はなんと一番の「若手」です。トップは徳富蘇峰で、長谷川如是閑、緒方竹虎などの諸氏も登場しています。貸し出しも可能です。

国・公費の記者会見

起立して拍手をお願いします

国・公費の昼食会または記者会見で、ゲストが入退場する際には、起立して拍手をお願いいたします。また終了後は、ゲストをお送りしてから退席されるようご協力願います。

クラブ訪問者

10月24日 ナルシサ・エスカレル比大統領秘書官
28日 マルシア・オリビエ メキシコ大統領府報道官

会員の著書(ご恵贈いただきました)

CIAの内幕 ターナー元長官の告発 佐藤紀久夫訳
激変する産業構造 花井喜六

寄贈書

基本英語類語辞典 朝日イブニングニュース社
 新興川柳運動の光芒
 あげは蝶が飛んだよ
 残留日本人への旅
 未来への軌跡
 NHK年鑑'86
 世界銀行年次報告1986
 世界開発報告1986
 NHK放送文化調査研究所 世界銀行
 計報 竹内清隆会員(個人D)が、十月十六日すい臓ガンのため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

十一月の行事予定(6日現在)

13日(木) 正午〜午後2時 コラソン・アキノ
 ファリピン大統領昼食会 プレスセン
 ターホール(10階)
 28日(金) 午後2時30分〜4時 ポール・チャン
 英国貿易産業相記者会見 記者会見室

会報委員長 深川 誠

委員 林 利隆 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
 連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三二七二二